

大学院
音楽研究科修士課程 日本音楽研究専攻活動報告
令和元（2019）年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 公開日: 2020-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000354

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



修士課程日本音楽研究専攻は、令和元年度現在、5人の修士学生、2人の研究留学生在籍しています。修士論文にむけた研究はもちろんのこと、それ以外にもさまざまな体験を通して、日本音楽と向き合い、理解を深めようとしています。

■柳川三味線の神髄にふれる

宝生 紗樹（日本音楽研究専攻1年）

インターンシップ制度を利用し、柳川三味線の研修を受けました。

地歌の多くは野川三味線で演奏されますが、京都市東山区にある花街、祇園甲部に伝わる地歌は柳川三味線のものが伝わっています。

課題曲「黒髪」は、花街で襟替え（舞妓から芸妓になる期間）の際に用いられる曲で、祇園甲部では地歌で演奏されますが、祇園甲部以外の花街では長唄で演奏されます。

研修では、地歌の世界の広さと三味線音楽の多様性を学ぶことが出来ました。



■日本で中国音律を研究

孟 祥健（研究留学生）

私は中国、または日本の伝統音楽の音律について研究しています。武内恵美子先生（伝音センター准教授）のアドバイスに従い、まずは中国の音律の歴史を踏まえ、たくさんの文献をじっくり読むことです。従って、私は周朝から清朝までのあらゆる文献を探り、一つずつ研究しています。昨年度は主に京房六十律、何承天

新律と蔡元定十八律の理論、南北朝から隋まで雅楽の変遷などを検討しました。

その他、研究テーマに直接にはかかわらない活動では、北京語言大学東京校の学園祭に古琴を紹介する講座に出ました。最初は古琴の歴史と文化を説明した後、現場にも数曲を演奏させていただきました。実に有意義な活動でした。



■海外からみる日本音楽研究

関本 彩子（日本音楽研究専攻2年）

女性が能の謡の発声法を掴むため、実技研修制度を使って、2名の能楽師の方に稽古、インタビューをさせていただいた。8月からは、ノルウェー・ベルゲン大学に交換留学し、英語で音楽学やノルウェー語の授業を受けた。地元の合唱団に参加し、ベルゲンにおける音楽文化のあり方を探ったり、ベルゲン大学日本語専攻の学生たちとの集まりに参加し、日本の魅力についての話を聞くなど、グローバルな視点から研究ができるよう研鑽を積んでいる。



■地歌箏曲研究と実践

三好 真利子（日本音楽研究専攻 1 年）

2019 年 12 月に実施された、公益社団法人当道音楽会による地歌箏曲の下期職格試験を受験し、称号を授かりました。実技と楽理、2 種類ある試験に向けて重ねてきた努力が報われ、胸を撫で下ろす思いがしました。お昼休みや空きコマの時間を活用し、院生部屋でこまめに三味線を練習するようにしたので、なんとか学業とも両立できたように思います。今後は、頂いた称号に恥じない演奏ができるように、以前にも増して稽古に励む所存です。

■地元の獅子舞をフィールドワーク

志川 真子（日本音楽研究専攻 1 年）

私は昨年度、私の出身地である長野県中野市で、獅子舞についての調査を行いました。主に調査したのは、中野市の小内八幡神社に古くから伝わる青獅子と呼ばれる獅子舞です。不気味な青い顔を持ち、ホ口幕の中の二人が肩車や逆立ちをする曲芸的な舞が特徴です。

私は、9 月中旬の秋祭りに向けた 1 ヶ月に及び練習にお邪魔しました。口頭伝承を中心とした芸の習得過程や、周辺地区の獅子舞との関係を知るとともに、村の人々の獅子舞に対する熱意を肌で感じた調査となりました。

